

# 令和7年度 学校関係者評価書(様式)

評価項目		本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	今後の改善点
学力向上×ICT活用		<ul style="list-style-type: none"> <li>つながりを大切に、自ら学ぶ授業実践</li> <li>校区で「自ら学び続ける生徒の育成」という共通の目標を立て、小学校と連携した授業改善。(リーディングDX事業)</li> <li>全教員の公開授業の実施。</li> <li>授業で効果的なICT活用を実践→交流。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>計3回の公開授業、計2回の公開授業週間を設定し、教員1人1回授業を公開し、1人1人がそれぞれ立てた目標に向けて授業改善を進めることができた。(今年は講師の方が継続して関わって頂いたこと、校区の小学校の公開授業に参加したことも有意義であった。)</li> <li>生徒の様子としても、安心感あるつながりの中で学ぶ様子が多く見られた。</li> <li>ICTの活用についても昨年度に比べると、各教科で試行錯誤しながら効果的な活用を進めることができた。生徒たちも効果的に使用する様子があった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自ら進んで学ぶ授業改善を進めていく中で、改めて生徒同士の安心感のあるつながりの重要性を感じた。今まで、天栄中が大切にしてきたつながりを作るという部分をしっかりと継続させていく。</li> <li>ICTの活用については、各教科中心に深く学ぶために、そしてよりつながりを作るために、効果的な活用法をさらに考えていきたい。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>→アンケート「自分から進んで勉強に取り組んでいる生徒」肯定的意見90%以上(昨年69.9%)</li> <li>→「授業中自分の考えと比較しながら、友達の考えを聞いている」肯定的90%以上(昨年91.7%)</li> <li>→「授業では自分の考えや疑問を発言しやすい雰囲気を作られている」肯定的意見90%以上(昨年87.2%)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>→アンケート「自分から進んで勉強に取り組んでいる生徒」(1年生:67.4%、2年生:72%、3年生:74%)</li> <li>→「授業中自分の考えと比較しながら、友達の考えを聞いている」(1年生:83.7%、2年生:90.2%、3年生:92.9%)</li> <li>→「授業では自分の考えや疑問を発言しやすい雰囲気を作られている」(1年生:74.4%、2年生:92.4%、3年生:85.1%)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アンケート結果を見ると肯定的な意見が多いが、改めて「誰一人取り残さない授業、クラス」を常に目指して、教員が生徒の様子をしっかりと見守っていくべきである。</li> <li>取り残される生徒が出ていないかを常に見とり、状況に応じた支援を行うことができるよう、スキルの向上を目指した研修を企画していきたい。</li> </ul>
長期欠席対策		<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒支援部会で週に一度、支援を要する生徒や不登校生徒の情報を共有するとともに、個々に合った支援の方法を検討し、必要に応じて医療や関係機関と連携を図る。</li> <li>→学期に一度教育相談を実施する。</li> <li>→鈴鹿市「安心して学べる学校を目指して」アンケート「困ったことがあれば学校の先生に相談できる」85%以上</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒支援部会での週に一度の情報共有を通して、欠席が多かったり長引いていたりする生徒の把握を早い段階でき、その場で支援方法を検討する時間を取ることができた。一方、部会での報告生徒数が多くなり、あまり検討する時間が取れないこともあったことが課題である。</li> <li>教育相談期間を設定し、担任が生徒に寄り添ってほしいに話を聴く時間を確保することができた。ただ、学年によっては行事と重なってしまい、相談時間の調整が難しい状況があった。</li> <li>→鈴鹿市「安心して学べる学校を目指して」アンケート「困ったことがあれば学校の先生に相談できる」(3年生81.6% 2年生90.2% 1年生82.2%)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>不登校となる事由が様々である中、多様なケースに対応できるように、対応する時間や生徒たちの安心できる居場所を今以上に確保していく必要がある。</li> <li>教育相談期間をいつ設定するかの見直し。教育相談期間に限らず、生徒がいつでも話をしやすい関係づくり、雰囲気づくりに努める。</li> </ul>
地域連携		<ul style="list-style-type: none"> <li>学校運営協議会、PTA諸会議をはじめ、地域や保護者に対し、学校経営方針や取組を継続的に発信することを通して、「目指す子ども像」を共有する。その上で、子どもたちの学びと育ちをどのように支えていくかという視点で、学校づくりへの協働の機会を増やす。</li> <li>学校運営協議会に教職員が参画できるように、時間設定、内容を工夫改善する。</li> <li>働き方改革の要請も踏まえながら、地域行事への生徒の参画を進める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校運営協議会での学校経営方針の継続的発信に加え、年間2回の授業参観により、より具体的に目指す学校像、子ども像を共有することができた。</li> <li>学校運営協議会の各回にキャリアステージの異なる教職員が参加することができ、授業参観後の教職員との懇談を通して、学校の取組の意図や工夫、地域の方々の思いについて交流・共有することができた。</li> <li>学校だよりやホームページを通して、地域の方々に継続的に丁寧な発信を行うことができた。保護者向けには、tetoruを活用した発信を充実させることができた。</li> <li>休日に行われる地域行事に、文化局が賛助を依頼される場合が多い。貢献できる場が生まれる一方で、部活動地域移行や働き方改革の観点から、負担増にならないように調整する必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>コミュニティ・スクール、学校運営協議会の取組が、地域全体、保護者全体に周知されるよう、引き続き情報発信を継続、工夫したい。</li> <li>学校運営協議会の熟議を通して共有することができた学校教育の役割や意義を、具体的な改善につなげるために、教育課程や組織の改善に努めたい。</li> <li>地域行事への参加については、関係諸団体等との情報交換を行いながら、持続可能で、より良い連携のあり方を模索したい。</li> </ul>
非認知能力育成		<ul style="list-style-type: none"> <li>「つながり」を作る授業づくり。(協働課題を設定した授業。)</li> <li>組織的な承認活動の実施。</li> <li>レジリエンスを育む授業の実施。</li> <li>→アンケート「自分には良いところがあると思う」100%(昨年83%)、「自分もやればできるという思いをもっている」100%(昨年89.2%)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天栄中学校の生徒は社会性についての項目は高い。やり抜く力、自己肯定感、セルフコントロールに関する項目については否定的な意見の割合の高い項目もあったため、来年度に向けての課題とした。</li> <li>「自分には良いところがあると思う」(1年生:76.7%、2年生:89.3%、3年生:78%)</li> <li>「自分もやればできるという思いをもっている」(1年生:81.4%、2年生:95.2%、3年生:84.4%)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>非認知能力については各学年や目の前の生徒にとって状況が様々であるため、目の前の生徒の現状や様子に応じて、働きかけていきたい。</li> <li>全学年で取り組んできた、承認活動や授業から「つながり」を意識することは社会性や自己肯定感の育成につながったのではないかと考えている。</li> <li>来年度はやり抜く力やセルフコントロールに関する力に関しても目を向けていきたい。</li> <li>学校の取り組みだけでは限界があるため、家庭や保護者の方にも生徒の現状について情報発信を続けていく。</li> </ul>
特別支援教育		<ul style="list-style-type: none"> <li>一人ひとりのニーズにあった支援を行う。</li> <li>特別支援学級の運営方針を明確に伝え、理解を促し、すべての教員が同じ方向性で生徒支援に当たれるようなシステムづくりを行う。</li> <li>生徒の情報交換をこまめに行い、それぞれの生徒の現状を常に把握し、その後の支援の手立てを協働しながら考え、実践につなげる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒一人ひとりのニーズを把握し、それぞれの教員で支援を行うことができたが、今年度は支援学級の在籍生徒が多い中、教員の休職や介助員の欠員、経験年数の違いなどにより一人あたりの負担が多くなってしまい、様々な場面で問題が発生してしまっていた。</li> <li>情報共有については昨年度と同様なシステムを活用、支援学級だけの朝の打ち合わせを行う、各学年担当から些細なことでも、特別支援主担当に報告連絡を行うことができた。</li> <li>学校組織の特別支援のあり方や情報発信、共有方法については課題に感じる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>特別支援の専門性の向上を図るとともに多くの先生方でも対応できる体制づくりが必要。支援学級の生徒という意識ではなく、学年の生徒、天栄中の生徒として意識を持っていく。</li> <li>主担当に連絡が入りづらい状況があるため、情報や連絡が入りやすいシステム作り。</li> </ul>
生徒指導		<ul style="list-style-type: none"> <li>SNSによるトラブルをなくすため、生徒に対するスマホ等機器やネットの適切な扱い、及びSNS等に係るトラブル防止の指導だけでなく、スマホに係る実態調査から、保護者への呼びかけを行っていく。</li> <li>今後も各学期のいじめについてのアンケートや教育相談等により、いじめの早期発見と早期対応に努める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>保護者や地域への呼びかけだけでなく、生徒がSNSについて学ぶことができるように、講師を招いたり講習を受けたりする機会を設けた。</li> <li>今後もいじめの早期発見と早期対応に努める必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大きなトラブルはなかったが、以降もSNSの使い方やマナーなど、リテラシーの学習機会をさらに充実させる必要がある。</li> <li>いじめゼロを目指して引き続き取り組んでいく。いじめの早期発見と早期対応に努めていく。</li> </ul>
人権教育		<ul style="list-style-type: none"> <li>互いの人権を尊重し、仲間を大切にするとともに、つながりあい、支えあう集団づくりができるようにする。</li> <li>互いに知り合う取り組みとして「生活をつづる」取り組みを行う。自分の想いを話すことや表現することを意識させたい。またその中で仲間の本音の想いを受けとめ、違いを理解したり共感できたりさせたい。</li> <li>各学年の生徒の実態に応じて、人権教材学習を組み込んでいく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人権教育部会を週一度行い、組織的に人権教育を進めることができた。</li> <li>互いに知り合う取り組みとして「つづり作文」を全学年で取り組むことができた。</li> <li>各学年の実態に応じた人権教材学習(1年生:障がい者学習、2年生:外国人の人権に係る問題、3年生:LGBTQ)を取り入れて授業を行うこともできた。1、3年生ではその中で出合い学習として講師の方や保護者の方から直接お話を聞くことができた。</li> <li>今年度は教職員が、教育的に不利な環境のもとにある子(視点生)を軸とした教育活動(学級経営や授業づくり、仲間づくり)をしていただくように働きかけた。各学期ごとに「子どもの置かれている状況や思い」を把握することに重点を置いて、レポート作成、レポート交流を行い、子どもの理解を深める時間を作った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人権教材学習に関しては、まず教員の知識理解が重要となる。若手教員も含めて、子どもたちと一緒に人権学習を深めていくためにも教員同士の事前学習の時間をしっかりと確保する必要があると感じた。</li> <li>人権教育の取組が教職員にとっての負担とならぬよう、目的や意義をしっかりと共有しつつ、効果的なやり方を考えていきたいと思う。</li> <li>つづり作文の交流の仕方は、生徒の心の負担にはならないように、クラスや生徒の実態に応じて個別に対応していく。</li> </ul>
生徒会		<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の声を取り入れながら、生徒会による学校行事の計画や運営を行う。</li> <li>地域と連携してピンクシャツ運動を行う。</li> <li>生徒会研修会で他校と交流し、各校の特色ある取り組みを知り、活動の改善につなげる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>体育祭では、生徒の声をもって生徒会役員が競技を考え、実行することができた。しかし、競技時の職員の動きや各競技の細かいルール等が十分に周知できなかったところが課題である。</li> <li>期間に余裕をもって取り組み内容を考えていくことができた。また、本校でのピンクシャツ運動の取り組みを、回覧板やのぼり旗を通じて地域にも周知することができた。学校内でも多くの生徒がこの活動に賛同してくれていたように思える。ただ、活動の場を地域へと拡げることができたが、地域の方々と本校生徒との繋がりはあまりつくることができなかったように感じる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校行事においては、滞りなく業務にあたってもらうために、当日及び前日準備における職員の役割分担を明確にし、要項等に記載する。</li> <li>生徒会役員が主体となって学校行事を行っていくために、事前の準備・打ち合わせを丁寧に行い、生徒のサポートをする。</li> <li>生徒会が主体となって行う活動について、学年会などを通じて周知してもらい、全校で活動に取り組む意識をもつことができるようにする。</li> </ul>
小中一貫		<ul style="list-style-type: none"> <li>小中教員同士の情報交換を充実させる。</li> <li>→学期に1回は各小学校の訪問を実施</li> <li>中学生と6年生との交流を充実させる。</li> <li>稲生小学校との連携を強化する</li> <li>→「学び」「育ち」の各委員会年2回以上開催</li> <li>「中学校授業体験」「人権フォーラム」「学びよつなぐ！プロジェクト」の継続実施</li> <li>稲生小学校への視察の実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>今年度は学期ごとに校区の小学校および稲生小学校への訪問を実施することができた。訪問した様子についても職員会議において職員に伝えることはできたが、文字ばかりの紙面での報告であった。来年度はより伝わりやすく工夫する必要がある。また、今年度はリーディングDX事業に関わって、学びの部会がチャットも活用しながら頻繁に行われ、情報交換や校区の課題の共有をすすめることができた。</li> <li>試験的に中学校と小学校で授業の成果物の交流を行うことができた。</li> <li>今年度も「中学校授業体験」「人権フォーラム」を実施することができた。しかし、稲生小学校においては、実施が難しい状況が続いている。「学びよつなぐ！プロジェクト」については、稲生小学校を含めた5校に訪問する予定となっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学期ごとの小学校訪問は、今後も継続したい。</li> <li>小学校訪問の報告は、写真も添えて伝わりやすく工夫し、小学校の児童・職員に対する理解を深めたい。</li> <li>「小学生に向けて説明を考える」「中学生にアドバイスをもらう」など、子どもたちの授業での交流を増やしていきたい。そのため、学びの部会のチャットによる交流を継続したい。</li> </ul>
教職員の働き方改革(業務改善)		<ul style="list-style-type: none"> <li>校務分掌組織の不断の見直しによって、ミドル・リーダーやプレ・ミドル層教員の専門性向上を促し、組織的業務遂行を促進する。</li> <li>OJTの充実による教職員の資質向上を図り、業務の平準化を促進する。</li> <li>調査、報告に要する情報の汎用化を図り、事務処理に要する時間を短縮する。</li> <li>働き方改革等を踏まえた部活動の在り方について保護者の十分な理解を得るために、情報発信の充実、工夫を図る。</li> <li>*指標：1か月当たりの平均過重労働時間 前年比-10% 過重労働時間月4時間5時間超延べ0人 年間360時間超0人</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>企画委員会や学年部会での方向性共有・情報共有が促進されたことにより、組織的業務遂行が進むと共に、業務改善が図られた。</li> <li>校務分掌組織改善によって役割が明確になり、各分掌担当者がリーダーシップを発揮して業務を遂行することができるようになった。</li> <li>校内における校務DXの推進により、情報共有が促進され、組織的な業務遂行につながった。</li> <li>若手教職員の増加やミドルリーダー層教員数の減少等により、業務の平準化が進みにくい現状がある。</li> <li>教育委員会等から求められる調査、報告が増え、事務処理に要する時間が増えている。また、校務DXの推進の反面で調査回答項目の視認性が低下し、逆に事務処理負担が増えることがある。</li> <li>熱中症対策等、安全確保の必要性が高まったことにより、部活動顧問が様々な対応に迫られ負担増となっている。</li> <li>働き方改革等を踏まえた部活動の見直しや業務改善の要請について、保護者の十分な理解を得るまでは至っていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>校務分掌組織の不断の見直しによって、キャリア・ステージに応じた専門性向上を図り、組織的業務遂行を促進したい。</li> <li>OJTの充実による教職員の資質向上を図り、業務の平準化を促進したい。</li> <li>分掌担当者の協働を促進し、教育活動の質の向上を図りたい。</li> <li>校内における校務DXの推進により、調査、報告に要する情報の汎用化を図り、事務処理に要する時間を短縮すると共に、学校運営の円滑化を促進したい。</li> <li>働き方改革等を踏まえた部活動の見直しや業務改善の要請について、保護者の十分な理解を得るために、情報発信の充実、工夫を図りたい。</li> </ul>